



内陸に避難した母子のために、実習で使用するベビー用品などを集めて届けた

そこで盛岡市内の産婦人科医師や助産師、子育て支援をしているNPOなどで集まり、その対策を話し合いました。

その後、被災地から避難してきたお母さんと赤ちゃんを内陸のホテルで受け入れるという体制が少しずつできていきました。しかし、その受け入れのための物資が足りないとのこと。そこで私は母子看護学だけでなく小児看護学の先生方にも声をかけ、学生の演習で使う沐

浴用のベビーバスや赤ちゃん用の肌着、バスタオルやベビー石けん、哺乳瓶などを実習室から集め、内陸に避難してきたお母さん方のもとへ届けました。

**助産師として女性支援の活動に参加**

震災後、自身の研究活動について考えたことは一切ありませんでした。臨床魂というのでしょうか。



# 被災地の女性を心身の両面からサポート 女性の体の専門家として被災地を支援

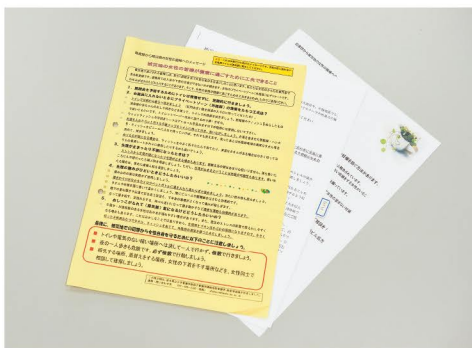
研究者として何ができるのか ①

## 内陸避難者に 実習用のベビー用品を寄付

大学では母子看護学講座助産学・母性看護学分野を担当しており、女性の健康支援や、妊娠・出産・子育て中の方の健康支援を専門としています。私自身も助産師と看護師のライセンスを持っており、助産師を目指す学生の指導も行っています。

東日本大震災発生時は大学構内の3階の研究室にいて、会議資料の準備をしていました。スマートフォンから緊急地震速報のアラートが鳴り廊下に出たところ、ものすごい揺れに襲われました。このまま床が抜け落ちるのではないかと恐怖を感じるほどでした。

春休みだったため学部棟に学生はおらず、教員皆で集まり駐車場の方に避難し、余震に怯えながら時を過



福島教授が作成し配布したチラシ。性犯罪への注意喚起や、避難所での健康に関する悩みへのアドバイスなどが書かれている

研究を目的とした行動ではなく、一人の臨床家として何ができるのだろうか、それをひたすら考え行動していた気がします。研究データとしてまとめたのはずっと後になってからです。

被災地を初めて訪ねたのは、発災から1週間くらい経った頃。以前から関係のあるもりおか女性センターからお声をかけていただき、3月下旬頃から被災地の避難所などを回る活動にも参加することになりました。これは、「もりおか女性センター」と、妊産婦と女性の命と健康を守るために活動している「国際協力NGOジョイセフ」が協働して行う事業で、女性の体の専門家である助産師の立場として参加してほしいとの要



福島 裕子 教授

1998年に着任後、看護学部助教授、准教授、教授を経て、2020年より学部長。助産師、看護師の資格を持つ。日本母性看護学会、岩手看護学会、岩手県母性衛生学会、ハッピーバース研究会など多数の学会・委員会の理事や役員も務める。

ごしました。その日は明るいうちに解散ということになり、一人暮らしをしている祖母や叔母宅に立ち寄りながら盛岡市の自宅に帰りました。

発災直後はメールも電話もつながらず、被害の規模も状況も分からない状態でした。初めて被災地の状況を知ったのは、何日か経って届いた宮古市の助産師からのメールでした。メールには、宮古の避難所には妊産婦さんがあまりいなかったこと、女性たちが尿失禁で悩んでいることなどが書かれていました。

そのメールを受け取ったのとはほぼ同じ時期に、知り合いの産婦人科の医師や助産師から、津波被害のあった地域の病院で出産はしたけれど、自宅が津波で流失してしまい帰る家がなくなくなった褥婦さんがいて、その方々を内陸に避難させなければならぬという情報も入ってきました。

請でした。金谷先生はじめ何人かの先生と地域で活動している保健師さんにもお声をかけ、参加を快諾。避難所をめぐりながら、妊産婦さんや小さなお子さんのいる方の健康チェックを行ったり、必要な物資をお届けしたりする活動をするようになりました。現地に向く前には、阪神淡路大震災の後に発足した「神戸ウイメンズネット」やその他の女性支援団体に、災害のときどんなことに困ったかとか、何を準備していけばいいのかなどを問い合わせ、いただいたアドバイスをもりおか女性センターと共有したりもしました。



福島裕子教授(右)と金谷孝子講師(左)。金谷講師は実家や親戚宅が宮古市にあり、津波の被害を受けた親戚も。福島教授とともに被災地支援を行ったメンバーの一人



山田町の避難所にて

4月には、看護学部の教員が順番に宮古市を訪問し、現地の保健師さんたちと一緒に安否確認や戸別訪問のサポートを行いました。

震災後、実は私には懸念していました。やはり時間が経つにつれて、阪神淡路大震災や、海外で起きた災害の後に報告されていた、大きな災害後にレイプなどの性犯罪が増える

震災直後は仕方がない部分もありますが、やはり時間が経つにつれて、女性ならではの悩みや困りごとが顕在化していったように感じます。トイレや更衣室の問題のほか、授乳するお母さんへの配慮がなかったり、支援で料理が振る舞われる際の準備や配膳、後片付けはすべて女性の役目だったという避難所もありました。

震災後、市町村の防災のための会議には、男女共同参画の観点からメンバーの1/3を女性にしようという目標値が掲げられるようになってきました。しかし2011年の震災当時、防災関係の会議に女性は入っていませんでした。避難場所や避難計画などは立てられていても、おそらくそこに女性の声は反映されていなかったのだらうと思います。国の方針としても防災会議への女性の参加は進んでいます。その声を生かせるかどうかは今後の大きな課題だと感じています。

地域に「あつてよかった」と思われる看護学部を目指す

岩手県立大学は、震災直後から学生ボランティアセンターを中心に、学生や先生方のボランティア活

という事例です。「岩手では起きないよ」との声もありましたが、性犯罪に合わないための注意喚起のチラシを作り、避難所の女性に配布したり、宮古市で戸別訪問活動をす

活動は、山田町の道の駅近くの、津波被害を免れた公民館を拠点に行われました。「助産師」と書かれたビブスを着て、避難所や各家庭を回りました。避難所には赤ちゃんを連れのお母さんの姿が思ったより少なく、不思議に思っていました。



2013年2月に実施された被災地演習。卒業後、県内で助産師として働く学生らが参加した

動が盛んでした。しかし看護学部の学生は必修科目が多く、活動に参加できない学生も多かったです。カッキー・Sというボランティアサークルが看護学部で発足し山田町での活動を継続していましたが、当時の3、4年生は実習や国家試験対策に忙しく、こちらもなかなか活動でき

内陸に避難していたお母さんたちからは、安心して暮らしてはいるけれど、あの震災を実際に経験したことのない人たちの輪の中で自分の被災経験はなかなか語れないという声を聞いていました。これから県内で助産師として働く学生も、いつかどこで震災を経験した妊婦さんやお母さんに接する機会があるかわかりません。被災地の女性たちがどんな経験を、どんなことに困つ

方もいました。そういうお話を聞いたり、一生懸命家の片付けをしてい

見えてきた、震災後の女性の問題

さまざまな支援団体が被災地に入っていたこの頃、避難している方々の中には、自分が助産師で女性の体の専門家だということ伝えると、「あつ、そうなの」という反応を返してくれる方もいて、体に関する困りごとはあるけれどもあまり言えないでいるんだらうなと想像できました。体のことはもちろん、災害後に増えるといわれる性犯罪や家庭内でのドメスティックバイオレンスなどの兆候もキャッチできる窓口でありたいという思いもありました。

たのかを学生にも知ってほしいと思

震災から10年が経った現在、私自身は被災地への直接的なサポートは行っていないですが、県の男女共同参画審議会が防災教育について発言したり、他県で女性のための避難所運営に取り組んでいる団体にアドバ

担当するようになつたので、その中で学生に被災地での経験を話した

ある避難所では、高齢者用に和式トイレに簡易的な洋式トイレをのせて使用していたそうなのですが、そのせいでトイレのドアが閉まらなくな

予測していなかったのは、尿失禁に悩む女性が多かったこと。通常出産間もない方や高齢者に多い症状なのですが、寒さに加えストレスが原因になることもあるそうで、困っている方の声が多く寄せられました。

看護学部の学部長を拝任して2年が経ちました。この10年の間に、県内には岩手県立大学以外にも看護が学べる学部や大学が増えました。

岩手県立大学だからこその点で、岩手県立大学だからこそのことができるのではないかと考えています。それには、これまでの研究成果をもつと外に伝えていくことも大切ですし、県や各自自治体のつながりを強固にし、求められるものとのマッチングをさらに進めていくことも重要だろうと思っ